法学部が2講師招き講演会

米の「ロースクール」を紹介

米で弁護士・公認会計士として活躍 吉村真宏氏

米国で弁護士・公認会計士として活躍する吉村真宏氏（昭58経営）を招いた法学部学術講演会 「アメリカにおけるLawSchoolと弁護士の活動」が10月29日、神田キャンパスで開催された。矢澤昇治教授の国際私法の講義の一環として行われ、米国のロースクール（法科大学院）の入試制度や、同氏が通ったウィスコンシン大学法律大学院の授業形態や施設の様子、学生の勉強法などを紹介。学生たちは第一線で活躍する同氏の貴重な体験談を傾聴した。
講演後に行われた法科大学院生を交えた座談会では、米国の法曹界の実情や、ロースクール卒業後、弁護士としての活動について語り、活発な質疑応答も行われた。

民法改正と現代語化を解説

慶応大法学部・同大学院法務研究科教授 池田 真朗氏

法学部・司法試験対策委員会主催の特別講演会が11月19日、神田キャンパスで開かれた。
「21世紀の民法典と民法学―最近の民法改正と民法典現代語化を契機に―」をテーマに、民法、特に金融法、債権法の研究家として著名な池田真朗慶応義塾大学法学部教授・同大学院法務研究科教授が講演。近年の急激な情報化、国際化に対応するために行われた平成10年以降の民法改正、特例法制定の動きと、同氏が作成に関与し、現臨時国会で審議されている民法現代語化法案、債権譲渡特例法改正法案について解説した。最後に「民法とは最大多数の幸福を側面から支える法律。社会との関わりを踏まえた広い視野に立ち、公平な判断力を持つことが学ぶ上で大切です」と話した。

プロとアマの違い 長谷川健太氏に聞く

飯田義明経済学部助教授「現代社会とスポーツ」

飯田義明経済学部助教授の「現代社会とスポーツ」では、スポーツ・ビジネスの世界で活躍中のゲストの体験談を聞いている。履修者は約500人。「経営者やライター、カメラマン、弁護士などの話から、プロスポーツの運営やそれを取り巻くビジネスに興味を持ってほしい」と飯田助教授は狙いを語る。社会体育研究所協賛の公開講座も開催しており、山口香さん（ソウル五輪・女子柔道銅メダリスト、現武蔵大学助教授）らが講演し、12月13日には後藤健生さん（サッカージャーナリスト）も講義した。

11月8日は、元サッカー日本代表で解説者・指導者として活躍中の長谷川健太さんが登場。「プロとアマの違い」について、現役生活や引退後の活動を披露し「プロは他人からの

評価を糧に向上し、結果を出さなければならない」と語った。最後に飯田助教授は「お話は一般企業など社会にも通ずるもの。皆さんもこういった姿勢を身につけてほしい」と述べた。

5団体9個人に「育友会奨励賞」

スポーツ、ボランティア、学業などさまざまな分野で大学の名声を高め、業績を表した学生に贈られる「育友会奨励賞」表彰式が11月13日、東京・九段のホテルグランドパレスで行われた。

4回目となる今回は、応募総数25組の中から選ばれた5団体・9個人（グループ応募含む）が受賞した＝下表参照。大瀬利行会長から賞状と副賞の賞金が手渡され、出席者から温かい拍手とエールが送られた。

育友会では、第5回奨励賞を募集中。応募締め切りは05年1月31日（月）。詳細は掲示および育友会ホームページhttp://www.ikuyuu.com）で。

表彰者	対象主題
市澤麻由子ほか3人	フェアトレードで築くパートナーシップ—今、何を消費すべきか—
伊藤太士	学生時代のスポーツ体験から得たもの—オリンピックに向けてのテコンドーと本学バドミントン愛好会活動を通して—
安平一樹	関東学生法律討論会優勝
櫛田雄二郎	総合格闘技プロデビュー、そしてメキシコ留学へ
福岡太樹	学生サーフィン・ナンバー1への軌跡と挑戦
塚原洋美	日本の伝統「民謡」これからも
横濱綾乃	日本で最初に台湾へ渡った少年と統治二年目の台湾の様子について
渡辺啓太	IDバレーの挑戦—臥薪嘗胆—
堤由惟	学生企業を目指して—パソコン教育事業の新展開—
アーチェリー部	アーチェリーを通じての障害者交流
テニス部（女子）	全日本大学対抗テニス王座奪還3カ年計画
コウサ展実行委員会（ネットワーク情報学部4年次生）	本学初の学生主催による学外展示会
卓球部（男子）	名門専大卓球部復活に一歩前進—9年（18シーズン）ぶり秋季関東学生リーグ戦優勝—
グリークラブ	専修大学グリークラブ40年の歴史を振り返って

【敬称略】

高津信三教授を偲ぶ

１０月１８日に他界した高津信三教授（前ネットワーク情報学部長）の思い出を、「教え子」だった卒業生２人に寄せてもらった。

雑談好きだった

徐 哲

物静かで学究肌というイメージが強いかもしれませんが、私にとっての高津信三先生は、雑談好きの面白い先生という印象です。話題作りがとても上手な方で、ゼミの授業でも身近な話題でゼミ生たちをリラックスさせてくれました。

先生と最後にお話したのは昨年１２月、情報管理学科４年次生の研究発表会の後、ゼミのみんなと食事をした時です。卒業を目前にした最後の研究発表の直後でまだ興奮状態。そんな私たちの労をねぎらい、先生は淡々と発表の講評をしてくれました。そして「卒業式の後、またみんなで食事をしよう」と言って下さったのですが……。結局、先生は卒業式にも出席できず、最後のお別れとなりました。
情熱を内に秘め、５８年という生涯を駆け抜けていったのでしょう。

本やPCのパーツに囲まれ

中山 千瑞

経営学部情報管理学科高津研究室の最後の卒業生として、私の中に残っている高津先生の思い出を述べさせていただきます。
私の中にある高津先生の姿は、研究室の中でたくさんの本やパソコンのパーツに囲まれながらパソコンに向かっている姿です。卒業研究の相談にうかがうと、先生は手を休め、さまざまな角度から意見を述べて下さいました。そして時々話が逸れていろいろな話をしたのを覚えています。例えばお子さんの話、奥様が先生の健康診断の結果を気にしていらっしゃったことなど、ご家族のことも話して下さいました。

私たちに指導していただいたころ、すでに先生の体調は良くなかったのだと思います。ネットワーク情報学部長として多忙な日々をお過ごしになりながら私たちを指導して下さいました。今はただただ先生のご冥福をお祈りし、ゆっくり休んでいただきたいと思います。

人的ネットワークの構築

問題解決能力を養うグループワーク演習

〈学部発信 ネットワーク情報学部〉

ネットワーク情報学部が誕生してから４年目に入り、１期生が間もなく卒業しようとしている。この１年間では、「プログラミングコンテストアジア地区予選出場」、「飛行船ロボットコンテストモデリング部門最優秀賞」、「展示会『コウサ展』の企画・実施」、「ビジネスモデリングコンテスト特別賞」と課内・課外活動で好結果をあげ、学部教育の成果が見え始めてきている。その内容は「ニュース専修」で報告されているのでご存じの方も多いであろう。

これらの活動の多くはグループで行われていることが特徴となっている。前身の経営学部情報管理学科にはない新しい試みとして、グループワークという活動を演習に導入した。最

近の情報に関わる仕事は多くの人間が関わっており、その中で自分の知識をうまく生かせるのかが重要な能力になっている。学生時代に、小規模な仕事であっても数人のグループで一定の期間をかけて問題解決する訓練をすることで、そのような能力を身につけられると考えられる。

いくつかの実例を紹介しよう。１年次生の情報リテラシー演習ではアンケート調査を行っている。調査対象、目的をメンバーで議論し、アンケート結果をまとめて発表するまでグループで行う。２年生にはコースごとに演習が用意されている。ネットワークシステム総合演習では、システムエンジニアさながらの業務プロセスでインターネット電子商取引の模擬サイトを作成した。コンテンツデザイン総合演習では、グループを制作会社に見立て、メンバーで役割を明確にしながらデジタルコンテンツを作成していく。３年次生の演習「プロジェクト」になると学生たち自らが問題を設定して、試行錯誤しながら成果物を作っていく。今年は１２月７日に、外部の人にも公開した発表会をアトリウムで行った。またその成果はホームページでも見ることができるようにしている。

２年次生までだと約2カ月、３年次生のプロジェクトだと1年間かけて行うグループワークで、学生たちはお互いのコミュニケーションを円滑にするため、どのように通信ネットワークを活用すべきか経験的に理解していく。メーリングリストを活用してお互いの連絡をとったり、サーバ上に議事録などの作業記録をのせてお互いに閲覧できるようにしたり、メッセンジャーを使ってリアルタイムで他のメンバーに疑問を解決してもらったり、ということをしていく。グループワークは人的ネットワークを構築し、それを動かすためにどのように通信ネットワークを利用したらよいのか理解する機会となり、まさに「ネットワーク情報学」を実践する場となっている。このようなグループワークの経験が、冒頭にあげた結果につながっていると考えている。（松永 賢次）

【ニュース専修2004年12月号5面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.